

研究所の思い出

梶山 林繼

研究所の昔については、平成 27 年度神道宗教学会の学術大会における学術シンポジウム「戦後神道研究の課題と展望—終戦 70 年を節目として—」の際に語り、皇學館大学の神道研究所と比較しながら話し合いしたのちに、『神道宗教』誌上（第 244 号、平成 28 年 10 月刊行予定）に「基調講演 研究所の思い出」として採録されるので、これが詳しい。ここでは残る思い出を。

研究所が現在の研究開発推進機構の一部となる前は、國學院大學の一部として教授・助教授制をとって来た。これ以前は、学校法人國學院大學の傘下であり、大学とは独立していた。私は設立の時は知らないが、昭和 33（1958）年に大学に入学してまもなく、研究所を知り、昭和 37（1962）年大学院在学中にはアルバイトをするようになった。以後、研究所と関係することになり、研究所に育てられたと言っても過言ではない。法人傘下の研究所は、大学の給料より一まわり安く、経済的には豊かではなかった。しかし、気分的には、和気藹々としていた。毎年親睦旅行があり、楽しい思い出であった。旅行費用も上の人が多く出し、我々はほんの少しで行くことが出来た。当時大学のバスがあり、これを使った。宿泊も折口信夫先生の叢蔭寮とか、二木謙一所員の豊島岡学園の佐久（蓼科）の寮であったり、日光、伊豆、会津、時には森磐根所員の世話で長良川の鵜飼にも行った。内野吾郎、安津素彦、藤井貞文、平山輝男などの教授方も同行であった。酔っ払って暴れ、叢蔭寮の管理人にもう来るなど怒られたこともあった。

バスの後方から大声をあげて駆けてくる男がいる。誰かを見れば、我がメンバーであったり、数々の思い出がある。



坪井洋文先生(左)と筆者 神道要語集編集のための成田山の図書館調査時 1962年8月

一方、研究所は地道な研究活動を続けていった。中村啓信さんの日本書紀校訂とか神道要語集の編纂とか神社史料のフィルムによる蒐集などなど、大学の研究部門の中心とならなければならない。

シンクタンク的存在を各々が意識して活動していたと言えるだろう。

大学が教育と研究を両輪として動いていかねばならないことは、いつの時代でも同じであり、過去を追うのではなく、これからも各々自覚の上、前進して行ってほしいと思っている。



上田賢治先生（左）と筆者 秋田国学者調査時に菅江真澄の墓前にて 1984年8月